

あとがき

本書は2010年に立命館大学国際関係研究科に提出した博士学位申請論文を加筆修正したものです。思い起こせば在学時は、好奇心に誘われ、ただ闇雲に書物を読み漁っては学問の世界の周辺をぐるぐると回っていただけでした。そのような私が学者の道を志したのは、カントの『永遠平和のために』を読み、共和主義という政治思想に出会ったことがきっかけでした。幸いにも、博士前期課程1年生のときに *The Republican Legacy in International Thought* の著者であるニコラス・オナフ先生の授業を受講する機会に恵まれたことで、共和主義への関心がさらに高まりました。日本になじみの薄い共和主義とはいったいどのような政治思想なのか？という素朴な疑問に対する答えを探すため書物を開くたびに、未知の世界への扉が開かれるように、学問の世界の新しい風景が私の目の前に広がりました。知的探究心に心奪われ、中世のスクリプトリウム(写字室)で黙々と書物と格闘した修道士のように、ひたすら古典古代、中世、近代そして現代における思想家の著作と奮闘し続けるなかで、自然と学者への志が高まっていきました。

道も分からず学問の世界を彷徨い、知の深淵に立って足がすくんだり、あらゆる方向に進んで抜け出せなくなったりすることもありましたが、そのようなとき、指導教授の龍澤邦彦先生が、学問の世界の地図となり水先案内人となって私を導いてくださいました。龍澤先生との知的な議論に心弾ませた時間は私の宝物であり、そのなかで学んだ、疑問を主題化し意見を形づくる難しさ、一つの疑問に対して時間を惜しまず熟慮する楽しさ、そして、物事の本質はその表に現れているものではなく、その現れ方であるという思考方法は、生涯私の研究を支えてくれるでしょう。龍澤先生には本当に多くのご支援をいただき、感謝の念に堪えません。

また、学部時の指導教授であった大久保史郎先生や、博士課程の副指導教授であった南野泰義先生、博士前期課程1年目にご指導いただきましたお茶の水

女子大学の小林誠先生、中谷義和先生、松下冽先生、佐藤誠先生、修士論文の指導と博士論文の方向性をご指導下さった上智大学名誉教授の廣瀬（川口）和子先生をはじめとする、これまでご指導、ご支援をたまわりました諸先生方、ともに切磋琢磨した友人たちにも、心より感謝申し上げます。そして、経済的、精神的、その他あらゆる面での家族の支援がなければ、研究生生活を続けることはできませんでした。この場を借りて、御礼を述べたいと思います。

現代社会は、決して先人たちが望んだような理想的な世界ではありません。つい先日パリで再び起こった痛ましいテロのように、普遍性と多様性の相克のなかで共和主義そのもののあり方が問われる事件も起こっています。戦間期にホイジンガが書いた『あしたの影の中に』で引用された聖ベルナルの言葉のように、「かの世界は夜に夜を重ねている」のかもしれませんが。しかし、ホイジンガが続けるように、「いかに悲惨な出来事がはびころうとも、この世界はやはり美しいものです。世の中の事態は、私たちに考えられるような具合には進まない、私たちは知っています」。未来に希望をもつことこそ人間としての義務であり、そのなかで私たちは、「いわば、朝まだきに目覚めたもの」であることが求められるでしょう。これからも、己の至らなさを忘れず、生涯一書生として、現代社会において軽視されがちな「真理」の探究に真摯に取り組む、知のアルティザンであり続けたいと思います。

最後になりましたが、今回、本書の刊行にご尽力いただきました法律文化社の小西英央氏、そして、出版助成によって本書を一冊の研究書として公表することを可能にしてくださいました立命館大学、及び研究助成によって第3章の研究を支えていただきました日本学術振興会に厚く御礼申し上げます。

2016年1月21日

川村 仁子